

ちよひんご語

第二三九号 往くまで

孔子は「求仁得仁」。仁の道を求めてこれをなしとげれば良いと言っています。仁に徳が重なり、仁に義が重なり、仁道を歩むもの、即ち、仁者たりえます。

所詮、坊主というのは、信者に災難降りかかる時、傘をさしかけてやれることが出来るか否かである。悩みを聞けば済むもので無く、サポートが伴わなくてはならないでしょう。坊主も数少ない「お経」を称えれば良いのなら小学生にもできます。内容を把握し、檀信徒の教化に勤しまなくてはいいけません。私は悩める諸人を導いて行ける先達にならなければ坊主にも成れないと思っていますが、まだです。

新年をすぎ人の死について一休さんの様に考えてみたいと思います。乃木希典大将は自殺自死した訳ですが「もののは玉も黄金も何かせん命にかへて名こそ惜しけれ」と歌いました。人生は焚き木と一緒に完全に燃え尽きてしまうのが良いのであって、不完全燃焼のまま燃え残ってしまったては死んでも死にきれないという事になります。「一日一生、朝に生まれ、夕べに死す」のたとえ、毎日一生懸命に生きる。人の一生、人生はそれだけです、ギブアップ諦めることは、アップアップしているうちに溺れ沈んでしまいます。英語の Up のように、奮起しなくてはだめです。唯、「come up」の様に出世ばかりを望んではいけません。人間は権力を得ると、錯覚し目が眩み、正確に自己の判断ができなくなり、しだいに身動きができなくなり、折角築いた地位から滑り落ちて行く人多し。部下の不始末は上司の責任になります。何時に成っても初心忘れず、身の丈に応じた行動をしていけば良いかと思えます。昔から、「金もいらず、名もいらず、権力もいらぬ人は始末が悪いようである」。世の中見てみますと、悪いことを考え実行してしまうのは頭の良い人が多いようです。明恵上人ではないですが冥利名聞を求めない人が苦なく生きている様に思えます。死んで持っていける財産はたった六文(銭)です。相続で揉める程残さぬが良い。強欲の人は

「火の車、造る大工はなけれども、おのが造りて、おのが乗りゆく」と、松野宗純師は「人間の欲望とは癌細胞みたいに増殖を続けるものかもしれない」と言って見えます。しかし乍ら、石川啄木の歌に「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来て妻としたしむ」や、「新しき明日の来るを信ずといふ自分の言葉に嘘はなけれど」とある。自分を卑下する必要もなく、希望を持つことは必要でありましょう。伊藤古鑑師は「地蔵菩薩は地蔵願王菩薩と申して、大地のように、あらゆるものを孕む母体であって、そこから、あらゆるものはあらわれ、育成され、成熟し、成就するという意義が成り立ったものと思われ

ます」と、説明されました。死して三十五日に閻魔大王様が愈々お出ましになります。お経に因りますと、「閻魔息諍(いさかいを収める)の声、罪人の心恨みて未だ甘情(許す気持ち)ならず。髪を策み頭を仰むけて業鏡(罪咎を写す鏡)を看せしむ、始めて知る、先世の事分明(はっきりした)なるを。」と、当山も地蔵菩薩様をお祀りしています。興教大師覺鑒上人の和讃に「悪趣に出現したまひて衆生の苦患を導けり。大慈大悲の深きこと、地蔵菩薩に如くは無し」、即ち、地蔵様の働きには「女性の安産・身体健全・病氣平癒・五穀豊穰・智恵を得る・等々」あり、又、当山の地蔵菩薩様の御利益は商売繁盛が加わります。斎藤茂吉氏の歌に「あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりかり」と、四方に輝き良き一年と成ります様に、ご祈念申し上げます。

令和二年一月一日

善壽界善入院油樹地蔵尊